

鏡の中の生霊

— *The Poor Clare* 小論 —

中 村 美 絵

I

*The Poor Clare*は、*Round the Sofa*というタイトルでまとめられた一連の作品の中の一編として知られているが、もともとは1856年、*Household Words*誌に単独で発表された作品である。

*The Poor Clare*は、実に不可思議な雰囲気 に溢れており、ギヤスケルの作品の中では、スリラー・ミステリー・怪奇小説等の系列に属する作品と言うことができる。しかし、作中の象徴的な描写は、作者の深い意図を感じさせ、*The Poor Clare*が単なる怪奇小説にとどまらない作品であることを示している。

印象に残った場面を取り上げながら、作者がこの作品で何を訴えたかったのかを探してみたい。

II

この作品は、1人の老人が自分自身の若き日々を回顧する形で始まる。語り手は、青年時代、事務弁護士の伯父のもとで、伯父の後継者となるべく、働きながら法律を学んでいた。彼は、仕事上の関わりと、旅先で見そめた女性ルーシー(Lucy)との関わりとの両面から、1つの奇怪な事件に巻き込まれていく。

物語全体は3つの章から構成されており、第2章には他の章の倍以上ものページがさかれている。質、量とも、第2章は作品の要であると言えることができる。

作品の冒頭の部分について、アーサー・ポラード教授は、その著書の中で

次のように述べている。

‘The Poor Clare’ is again one of those tales that take so long to start that the reader is puzzled about its direction.¹⁾

*The Poor Clare*も、なかなか物語の本筋が始まらないので、読者がこの先どうなるのかと悩んでしまう作品である。

確かに、ポラード教授の指摘するように、第1章冒頭の部分の前置きが長く、ストーリーの展開も遅すぎるといった感じは否めない。

しかし、第2章にはいるとこの不満は直ちに解消される。物語は急展開を見せ、迫力、スピード感とも申し分なく、読者を物語の中へと引き込んでいく。第1章では明らかにされなかった語り手と登場人物との関係が第2章の初めの部分で明確になると、筆致は生き生きと勢いを増し、読者の心をしっかりとらえて離さず、その興味を終章へとつなげていく。

ここで作品のあら筋を簡単に御紹介しよう。

*The Poor Clare*の主人公ブリジット(Bridget)は、ある日愛犬をギズボン(Mr. Gisborne)という軍人に撃ち殺され、深い恨みを抱く。ブリジットの激しい怒りと憎悪は呪いとなってギズボンにふりかかる。ブリジットの呪いは、ギズボンの愛娘ルーシーの生霊の出現という形で表われる。ところが皮肉なことに、ルーシーはブリジットの娘メアリー(Mary)の忘れ形見だったのである。メアリーは外国へ行って消息を絶っており、ブリジットは、そうとは知らずに実の孫にあたるルーシーに呪いをかける羽目に陥ってしまったのである。事情を知ったブリジットは、もはや自分の力の及ばないものとなってしまった生霊を消滅させるために精神的な闘いに専念する。アントワープにある聖クララ会という修道会の修道女となり、禁欲的で献身的な毎日を送る。しかしブリジットの努力にもかかわらず、ルーシーの生霊は一向に退散せず、ルーシーや語り手たちを悩ませ続ける。やがて戦場と化したアントワープでブリジットは、持っていたわずかばかりの食べ物の全てをギズボンに与え、自分自身が生霊の消滅を宣しながら餓死するという壮絶なシーンで物語は幕を閉じる。

III

作品のタイトルとなっている“Poor Clare”とは、“Poor Clares”という修道会の修道女のことで、“Poor Clares”は日本では普通、聖クララ会、またはクララ童貞会と呼ばれている。聖クララ会は、クララによってイタリアのアッシジに創立されたカトリック女子修道会で、清貧を理想としている。*The Poor Clare*の第3章で修道女たちの生活ぶりをかいま見ることができる。質素な服装をし、素足で過ごし、住民たちから捧げられた物だけで生活し、貧しい人々にはパンくずのかけらまでも分け与え、困窮する者を助け、しかも日々の食べ物を乞うことは許されない、という厳しい生活である。修道女たちを餓死から救うためにはたった1つの小さなベルがあるだけである。このベルは、修道女たちが24時間食べ物なしに過ごした場合のみ助けを求めて鳴らすことができるのである。*The Poor Clare*の終わりの部分で、このベルが鳴らされ、人々が修道女たちを救おうと修道院めざして走り出し、群集が修道院へとなだれ込むシーンは圧巻である。

... and in a moment we were in the street, moving along with the great current, all tending towards the Convent of the Poor Clares. And still, as if piercing our ears with its inarticulate cry, came the shrill tinkle of the bell. In that strange crowd were old men trembling and sobbing, as they carried their little pittance of food; women with tears running down their cheeks, who had snatched up what provisions they had in the vessels in which they stood, so that the burden of these was in many cases much greater than that which they contained; children, with flushed faces, grasping tight the morsel of bitten cake or bread, in their eagerness to carry it safe to the help of the Poor Clares; strong men — yea, both Anversois and Austrians — pressing onward with set teeth, and no word spoken; and over all, and through all, came that sharp tinkle — that cry for help in extremity.

We met the first torrent of people returning with blanched and piteous faces; they were issuing out of the convent to make way for the offerings of others. “Haste, haste!” said they. “A Poor Clare is dying! A Poor Clare is dead for hunger! God forgive us and our city!”²⁾

…そしてほどなく、私たちは通りに出て、巨大な人の流れとともに進んでいた。皆、クララ修道会めざして進んでいた。そしてまだ言いよのない叫び声で私たちの耳をつんざくように甲高くリンリんと鳴るベルの音が聞こえていた。その奇妙な群集の中には、震えながら、すすり泣きながら、わずかな食べ物を運んでいる老人たちがいた。とめどなく流れる涙で頬を濡らしている女たちもいた。女たちは、器の中に入れてある食べ物を手当たり次第つかんで持って来ていた。こうした場合はほとんど、食べ物は持ちきれないほどずっしりとしていた。赤い頬をした子供たちもいた。かじりかけのケーキやパンの一片を、無事に運んで修道女たちを助けたい一心でしっかりと握りしめていた。強健な男たちもいた。もちろんアントワープの人たちもオーストリア人たちも……。歯をくいしばり、黙々と前へと押し進んでいた。その全ての人たちに、全ての人たちの耳に、鋭いリンリントという音が聞こえていた。それは窮地の助けを求める叫び声だった。

私たちは、青ざめた悲しげな顔つきで帰って来る人々の最初の一団に出会った。彼らは他の人たちが捧げ物ができるようにと修道院から出て来たところだった。「急いで！急いで！」と彼らは言った。「修道女が1人死にかけている。飢えのために死んでしまう。神よ、私たちと私たちの町を許し給え！」

戦争による飢饉と繰り返される戦闘のためにクララ修道会の修道女たちのことをしばし忘れていた人々は、大人も子供も、老いも若きも、男も女も、誰もが食べ物を手にいっせいに走り出す。この場面では、血生臭い戦闘シーンが続いた後であるため、なお一層人々の善意が強く印象づけられる。しかしそれと同時に、修道女を餓死へと追いやったことへの悔恨の情もひしひしと伝わってくる。クララ修道会のベルは、人々の良心のバロメーターとも言えるであろう。第3章の半ばで、語り手が滞りした宿の主人がこれまでベルが鳴るのを聞いたことがないと述べているが、長い間人々は、クララ修道会の修道女たちの存在を忘れたことなどなかったものと思われる。地域の人々の信仰が修道女たちの生活を支え、修道女たちも人々のために尽くすという良い協力関係が築きあげられていたのである。ところが、戦争になり食糧が不足するようになって、人々は物質的にも精神的にも余裕がなくなり、そのすばらしい協力関係の均衡がくずれてしまった。クララ修道会の修道女たちは、自分たちのわずかな食糧を困窮した人々に分け与え、その結果、生命の危機にひんすることになる。修道女たちの篤い信仰に基づく献身と、修道女

たちを救おうと人々の善意が結集する場面は、殺伐とした戦闘シーンの続く第3章後半の部分の中で一服の清涼剤となっており、際立って美しい光を放っている。

IV

“She is freed from the curse!”³⁾

「彼女は呪いから解放された！」

これは *The Poor Clare* を締めくくるブリジットの言葉であるが、この言葉には解放の喜びが溢れている。ルーシーが呪いから解放され自由になったこと、すなわちルーシーの生霊の消滅を宣する言葉なのである。このルーシーの自由は、ブリジットの自由でもあった。ブリジットの憎悪が創り出したこの生霊というモンスターはもはやブリジットの力の及ばぬものとなり、消滅させるためにブリジットは命を削るような激しい精神的な闘いを要求されたのだった。

姿形は生き写しでありながら、しかも邪悪で恐ろしい様相のルーシーの生霊は、通常ならルーシーのとらないような行動をとる。それは、優しく、物静かなルーシーからは想像もできないような行動である。しかし、大事な球根が埋めてある花壇で踊り回ったり、人のまねをしたり、あざけり笑ったりすることは、今まで表面には表われていなかった、ルーシーの内なる願望であったのかもしれない。もちろん生霊の行動の全責任がルーシーにあるという訳ではない。しかし、ルーシーの生霊は、ブリジットの呪いが生み出したルーシーとは無縁のモンスターではなく、ルーシー自身から分離したもう一人のルーシーであることは明白である。それは、ルーシー自身多少とも意識したことのあるか、あるいは全く意識されることのなかったルーシー自身の醜い面なのである。人は本来多面体であり、多くの心理的葛藤の中で個人の人格が形成されている。良い面ばかり持つ者もいなければ、悪い面ばかり持つ者もいないであろう。作中でルーシーはかなり理想化された人物として描かれている。父親ギズボンがルーシーを遠ざけても、父を恨むこともせず、あくまで自分自身の呪われた運命に耐え、生霊の罪を負い、一心に祈り、ひたすら解放の日を待ち続ける。ルーシーを偶像化したのは、邪悪なデーモンである生霊と対照させるための作者の意図であると思われる。

フェリシア・ボナパルト女史は、その著書の中で次のように述べている。

Like many nineteenth-century novelists, Gaskell felt freer to express herself in her stories than in her novels.⁴⁾

多くの19世紀の小説家たちの例にもれず、ギヤスケルも、長編小説においてよりも短編小説において、より自由に自分自身を表現できると感じていた。

ボナパルト女史の述べているように、ギヤスケルは、長編小説においてよりも、短編小説において、ギヤスケルらしさを見せていると言えるであろう。短編小説の中でもことに怪奇小説、ミステリー、超自然小説等の一連の作品群の中にこの傾向は強く表われているように思われる。ルーシー自身の口から語られる、鏡の中に生霊の姿を見るシーンは、大変象徴的である。

In the great mirror opposite I saw myself, and right behind, another wicked, fearful self, so like me that my soul seemed to quiver within me, as though not knowing to which similitude of body it belonged.⁵⁾

正面の大鏡に私が映っていました。そしてすぐ後ろにもう一人私が映っていたのです。邪悪で恐ろしい私が……。あまりそっくりなので、私の魂はどちらの体にいるのかわからなくなったのかブルブルと震えているようでした。

これは、ルーシーが鏡の中に、自分自身と、さらに自分自身の生霊とを見るシーンである。生霊は、もう一人の自分、人の持つ二面性、二重人格等の象徴と思われ、また鏡も自分自身を映し出すところから、やはり同様のものの象徴と考えられるが、ギヤスケルはさらに一步踏み込んで、これら2つを組み合わせることにより、善悪だけでははかりきれない、人間心理の複雑さを表現したかったのであろう。

また、生霊の設定についても興味深いものがある。日本文学の『源氏物語』の中には、六条御息所の生霊が葵の上にとりついて苦しめたり、夕顔を呪い殺したりする場面が出てくるが、普通この例のように、Aという人物がBという人物に恨みを持った場合、Aの生霊が出現してBを苦しめたり呪い殺したり

する例が多く見られるように思う。*The Poor Clare*においては、父親の罪を娘が負うことで多少複雑になっているが、単純に図式化するならば、Aという人物の呪いがBという人物の生霊を出現させBを苦しめるという形をとっている。他人の生霊に苦しめられるのも大変恐ろしいことであるが、自分自身の生霊に苦しめられるのは、さらに一層恐ろしいことのように思われる。自分自身が自分自身によって苦しめられるこの設定は、ギヤスケルの他の作品*The Heart of John Middleton*などにも見られるように、自分の犯した罪に一番苦しめられるのは他ならぬ自分自身であることを暗示しているように思われる。

父親の罪を一身に背負ったあわれなルーシーは、ひたすら祈り、苦しみに耐え、解放の日を待ち、やがて苦しみから解放される。なかば被害者でもある気の毒なブリジットは、人に呪いをかけるという罪のために、自分自身の心と闘い、最後は命とひきかえに、ルーシーの生霊を消滅させる。第2章の終わりでブリジットは自分が呼び出したデーモンと闘うという決心を語っているが、この闘いは、生霊と直接闘うのではなく、自分自身の心との精神的な闘いを意味している。ここでブリジットが超能力を発揮して生霊と直接的に対決したのであるならば、それは、単なる娯楽作品としての怪奇小説で終わったことであろうが、ブリジットが挑んだのが精神的な闘いであったことは、怪奇小説としても非凡なものがあり、怪奇小説も、単なる娯楽作品では終わらせない、ギヤスケルの力量を示すものと言えよう。

V

ルーシーは、美しく、優しく、清純で、ゴシックロマンスのヒロインに見られるようなタイプの女性である。かたや*The Poor Clare*の実質的なヒロインであるブリジットは、奔放で、人間のあらゆる面を持ち、しかもそれが表面化された人物である。愛情表現も赤裸々で行動力にも富んでいる。善悪両方を具有し、しかもそれをあからさまに表現し、感情表現は必ずしも素直ではないが正直で、気性が激しく、愛することにも憎むことにも情熱的で、執念を燃やすことも人並はずれている。ブリジットと娘メアリーは、共に激しい性格のために口論が絶えなかったのであるが、ブリジットはメアリーを深く心の底から愛しており、メアリーが外国へ奉公に出、消息を絶つと、外国へ出かけて行って数年間ものあいだ捜し求めてさまよい歩く。メアリーの愛犬を、娘を愛するようにかわいがり、この愛犬を射殺したギズボンを恨んで呪いをかける。この呪いは、ギズボンの一人娘ルーシーの生霊という形になっ

て表われる。ところがルーシーはメアリーとギズボンの間に生まれた子供であり、そのことを知ったブリジットは、ルーシーの生霊を消滅させようと激しい精神的な闘いを開始する。アントワープに渡り、クララ修道会の修道女となり、祈りと献身の日々を送り、最後は、少ししかない食べ物を、重傷を負った宿敵ギズボンのそばに置いてやり、自分自身は餓死するのである。ブリジットが心の底からギズボンに対する恨みを解き、許す気持になった時、呪いは解け、生霊は退散したのである。ブリジットは命とひきかえにこの勝利を手にしたのであった。

このように、*The Poor Clare*のヒロインは、ギヤスケルの他の作品には例を見ないような激しい感情を持ち、また、たくましい行動力を持った非凡な人物なのである。「魔女」と噂され、確かに超能力を持ち、多分に「魔女」的な要素を持った人物でもある。

ルーシーの父ギズボンの描き方も、この作品の中で注目すべき点の一つであると言えよう。ギズボンは外国へ行った際にメアリーをかどわかして、奉公していた家から連れ出す。その後、だまされたことを知ったメアリーは、激しい川の流れに身を投げ溺死する。ギズボンは後悔し、後に残された娘ルーシーを慈しみ育てる。狩りに行った日の帰り道、獲物がなくいらいらしていたギズボンは、小道を走り抜けたブリジットの愛犬を思わず射って死なせてしまう。しかし、反省の色もなく、お金で解決しようとする。ブリジットは深く悲しみ、また激しく憤り、怒りの言葉をギズボンにぶつける。冷笑を浮かべその場を立ち去ったギズボンであったが、ブリジットが「魔女」であるとの噂を聞き、さらにメアリーがブリジットの娘であることを知り、不安の色を隠せない。しかし、まだこの時点では、ブリジットはメアリーに関するギズボンの罪を知らなかったのである。

ここで、第2章よりブリジットの呪いについての語り手の言葉を引用してみよう。

“... The roots of that curse lie deeper than she knows : she unwittingly banned him for a deeper guilt than that of killing a dumb beast. The sins of the fathers are indeed visited upon the children.”⁶⁾

「…この呪いの根はブリジットが知っているより深いところにあります。物言わぬ動物を殺すことよりもっと深い罪のために、ギズボンを無意識のうちに呪っていたのです。まさに『父親の因果が子に報いた』のでした。」

ギズボンへの呪いは、彼に直接的にはふりかからず、娘のルーシーの災難となって現われる。一般的には、我身にふりかかるより子供にふりかかることの方が父親にとって痛手が大きいものであると思われるが、ギズボンはこの悲劇に直面しても無責任な行動をとる。昔犯した自分の罪を忘れたいためか、呪いを恐れるあまりか、娘ルーシーを遠ざけ、父親であることを放棄してしまっている。ルーシーに忠実なミセス・クラークや、ルーシーを愛する語り手や、語り手の伯父は、ルーシーを救おうと様々な苦労や努力をするのであるが、本来は、父親こそ率先して娘を救おうとすべきであろう。ギズボンは、父親としての資格も、人間としての温かみも欠如した人間像に描かれている。

ギヤスケルは生後1年で母親と死別するが、母方のおばにひきとられ、美しい自然の中で幸せな少女時代を過ごす。しかし、父が再婚し、継母との折り合いが悪かったこともあって、父親を愛し尊敬しながらも、どこか満たされない思いを抱いていたように思われる。*Mary Barton*や*Cousin Phillis*に描かれたすばらしい父親像には、ギヤスケルの父に対する愛と尊敬の念が、そして、この*The Poor Clare*の父親像には、求めても充分には与えられなかった父親の愛への満たされない思いが反映していると言えるであろう。

VI

以上、この作品のテーマと思われる部分に焦点をあてて述べてきたが、部分的に取りあげて強調したため、作品全体が殺伐とした印象で、暗く潤いのない作品のように感じられるかもしれない。しかし、自然描写の美しさも、登場人物たちの善意も、本来のギヤスケルの作品の持つ温かみはこの作品においても決して失なわれてはいない。大きな貴族の館の描写や深い森の描写は、怪奇小説らしく多少の不気味さを秘めながらも、美しく神秘的に描かれ、ギヤスケルの得意な自然描写の技も一層冴えを見せている。

また、語り手、ブリジット、ルーシー、ミセス・クラーク、語り手の伯父、宿の主人等、登場人物たちの温かな善意も十分に表わされている。この作品の中で、ほぼ一貫して悪役を演じたギズボンでさえ、以前はルーシーにとって優しい父親であったことが描かれており、人の心は複雑かつ不可解なものであることを示している。ギヤスケルは、人々がそれぞれ様々な側面を持っていること、一筋縄ではいかない人間心理の複雑さを描きかかったのであろ

う。それを具現しているかのようなヒロインのブリジット。彼女は時には人を呪う悪魔に変わり、また、人の持つ最高の愛を示す天使にもなる。

*Dr. Jekyll and Mr. Hyde*には二重人格が描かれ、人間のもつ二面性を強調しているが、ギヤスケルは*The Poor Clare*において、二面性のみならず、それ以上の複雑さを持つ人の心の多面性を描いていると言えよう。

注

- 1) Arthur Pollard, *Mrs. Gaskell; Novelist and Biographer* (Manchester: Manchester University Press, 1965), p. 179.
- 2) Elizabeth Cleghorn Gaskell, *The Poor Clare in The Works of Mrs. Gaskell*, 8 vols. Knutsford Edition. (1906; rpt. New York: AMS Press, 1972), vol. 5, pp.388-389.
- 3) *The Works of Mrs. Gaskell*, vol. 5, p. 390.
- 4) Felicia Bonaparte, *The Gypsy-Bachelor of Manchester: The Life of Mrs. Gaskell's Demon* (Charlottesville and London: University Press of Virginia, 1992), p. 48.
- 5) *The Works of Mrs. Gaskell*, vol. 5, p. 361.
- 6) *The Works of Mrs. Gaskell*, vol. 5, p. 367.